

栞

森野 水琴

十月の第一金曜日。彼は仕事帰りに薄紫色の栞しおりを二枚買った。一枚は赤みの薄紫に染まったもの、残りの一枚は青みの薄紫。

帰宅して赤みの薄紫を包装紙から取り出す。赤みが増したように見えた。本棚から読みたい本を選び、栞を使い読み始める。読書の秋にふさわしく土日に読みまくろうとしている。

長丁場になるので読書灯をつけながら枕元で読む。寝ては読み、読むでは寝て、金曜日の夜が更けていく。

土曜日の朝。彼は枕元の本を読んでいる。朝昼兼用の食事に出かけるまで読みふけていた。外食に行く前に栞を本に挟み「留守番よろしく」とささやきかける。

外食から帰ってくると、また枕元の本を読む。一冊読み終えると、次の本を読み始める。栞が馴染んできた。

夕食は買い込んだパンとコーヒーで済ませた。

枕元の本を読んだり、深夜にパンを食べたりしながら、少し眠り、気が付くと日曜日の朝になっていた。

朝食もパンとコーヒー。ほどなくして枕元で読書。二冊めを読み終え、栞に微笑みかけて次の本。昼食もパン。夜の外食に出かけるまで読書さんまいである。

外食から帰ってきて机に向かつて本を読んでいる。余韻を楽しんでいるように見える。明日から仕事。読んでいる本は机上に。その他の本は本棚に戻して熟睡した。

月曜日の夜。仕事を終えて、外食を済ませ帰宅した彼は青みの薄紫の栞を包装紙から取り出した。

本棚から洋書を取り出す。西洋の美学について書かれた本である。教養を深めるために、彼は青みの薄紫の栞を選んだというわけである。

翻訳するわけでもないが、週末ほど気楽には読めない。

翌日の仕事に差し障りのないように早めに読書を切り上げた。

机の上には週末に読んでいた本と、きょうの本が仲良く並んでいる。それぞれの栞が微笑み合っているようである。

金曜日の夜。またしても週末の読書さんまいを楽しもうと、彼は夕食を外食で済ませてから食料を買い込んできた。

枕元に本を持ち込み読みふける。

赤みの薄紫の栞が微笑んでいるかのようなのである。

彼も気楽に読んでいく。

夕食のため外出する以外は読み進めていく。

すっかり週末の習慣になりそうである。

冬になり暖房の効いた部屋で彼は本を読んでいる。

開いたばかりの本は冷たい。吹きかける息が栞を温める。

春になると過ごしやすい気候に心もなごむ。

ときおり春眠に見舞われながら彼は栞片手に本を読んでいる。

猛暑の夏。冷房を効かせて本を読む。

栞も汗ばみそうである。

また読書の秋になった。彼は仕事帰りに薄紫の栞を二枚買い足した。赤みの薄紫と青みの薄紫である。

平日は青みの薄紫を使って二冊読み、休前日からは赤みの薄紫を使って枕元で二冊読む。栞たちが微笑みあいながら夜が更けていく。